

タイトル「耳元にゆんゆん」

元の話:なし

著者:柿ノ木コジロー

あらすじ:小5の夏休み最終日、突然ガキ大将に呼び出された僕。ひどい目に遭うのでは、との杞憂は驚きの出来事に払しょくされる。しかし翌日登校日で、僕はひどい裏切りを食らう。このままでいいのか。

アピールポイント:子どものひたむきさ、残酷さ、それから案外執念深い点が魅力の短編です。

文字数:4999字

-----

「タカシ」クラスの柴田健が、突然家にやって来た。

「ちょっと来い」小学五年の夏休み最終日、昼下がりのことだった。

健はガキ大将で取り巻きが多い、自分のような引っ込み思案で本の虫とはおよそ相性が良くない。口もロクにきいたことないのに、こんな時急に呼び出したのは、いったいどんな恐ろしい理由なのだろうか。僕はしぶしぶ、見ていた『宇宙の神秘大図解』にしおりを挟んで、玄関先に出た。

夏休みの間、誰とも遊んでいなかった、一学期にも特に事件はなかった……はずだ。なのに今さら何だ？ 暑いからムカつくとか言って仲間が待ち構えていて寄ってたかって僕をいじめるのか、それとも溜まった宿題をいっぺんにやらせるつもりなのか、どちらにせよ素敵な内容ではなさそうだ、それでも何も言い出せない僕は、気づいたら小さな広場の片隅にいた。

健の他には誰もいない、白い乾いた地面がひろがり、スズメすら姿を見せていない。

蝉の合唱すら、絶え絶えになっているようで、あたりは気味が悪いくらい静かだった。

目の前の健は思いがけず、真剣な顔だ。時折、くい、と頭を動かして片手で何かを払うような仕草をするのだけ気になったが。

「なに」ようやく声が出た。暑さもあって口の中がカラカラだ。

「タカシ」一歩近づく健の目が、血走っていた。

「オマエ、ユーフォー信じてるんだよな？」

「ゆ、ゆーふぉー？」唐突なことばに目を丸くする。

「こないだ女子と話してたじゃんか？ アメリカのどっかにユーフォーが不時着して、って」

「ああ……」終業式の日のことだろう。前夜にやっていたTVの超常現象特集で、UFOのことが大きく取り上げられていた。たまたま隣の席の愛ちゃんが「あれ、タカシくん信じる？」と振ってきたのがきっかけで、そんな話をしたのだ。愛ちゃんは幼稚園からの幼馴染なので少しは話がしやすい。それにふんわりした笑顔と片えくぼがチャーミングだ。そして

その上、僕は UFO の存在についてはかなり肯定的だ。それでつい僕も、いつもより饒舌になっていたのかも知れない。

それにしても急に、名前では呼ばずに「女子」だなんて、何なのだろう？

もしや……ヤツ、愛ちゃんが気になっているのか？ それで僕が彼女と楽しそうに話していたのが面白くなって、今さら文句を？

と思ったが、よく見ると彼は頭をせわしなく動かして何か気にしている。歩いている時は気づかなかったが、立ち止まるとひどく目についた。

「柴田くん、それがなにか」

「くそっ」健がいきなり、自分の耳をひっぱたく。頭をめぐらせながら二度、三度、そして最後に「くそっ」くるりと振り返って両手を打ち鳴らした。

振り返った彼の目はこの炎天下の中で瞳孔が大きくひらいていた。

「見えたか？ オマエにも」

「なにが」僕には、血迷った有様の健しか見えていない。「虫でもいたの？」

「ずっとさ、ずっと」相変わらず視線をぐるぐるとめぐるせ、彼がつぶやく。

「休みに入ってからずっと、耳元でユーフォーがさ」

「えっ？」

「ずっと、ゆんゆんゆんゆんゆんゆんって飛び回りやがって」声はすでに泣き出さんばかりだ。

「叩き潰そうとしても、しばらくいなくなってからまた、ゆんゆんゆん……」

「それ、多分、虫だよ」

小さな声で言ってみる、だが「違う」聞いたことのないような凄みのある声でそう答えたきり、すでに彼はあたりを油断なく見まわしていた。

声の調子で、もしかしたら彼は本当のことを言っているのかもという考えが頭をよぎる。

たとえ幻聴にせよ……本当に心神喪失一步手前にまで追い詰められているとか。

少し気の毒になり、僕は声をひそめる。

「まだ、音きこえる？」

「ああ」健も囁いて、油断なくあたりを見回している。

「ちょっと、止まってて」共犯者的な声になっていただろう、彼はぴたりと身動きを止めた、視線も動かさず。

僕はそっと、彼に近づいていく。しゃり、と白い砂が静かに鳴った時だけいったん僕も動きを止め、またそっと近づく。

ようやく彼の正面近くに寄った、忍ばせた息遣い以外には音は聞こえない、いや……

「わかるか」健が息だけでそう言って、左目を微かにすがめた。

確かに、僕の耳にも微かな音が届いた。

ゆんゆんゆん、いったん音が止んでまたすぐにゆんゆんゆんゆん。

健の左耳のすぐ上あたり、ゴマ粒くらいの何かがふわふわと飛んでいた、かと思うとすぐ

に身をひるがえし頭の後ろにいて、今度は彼の胸元の反対側から出てきた。

そいつはゆっくりと揺れながら高度を上げ、僕たちの顔の間で不安定に一旦停止した。停止といっても、ずっと軽く意図的な動きで揺れている。

粒は確かに銀色に光っていた。

とっさに僕は右手を出してそいつを掴んだ。思いがけず、手の中に粒がすっぽりと収まった、と思ったとたん「痛い！」蜂に刺されたような刺激で僕は手を開いた。

ふわ、と手のひらから下に向かって粒が飛び出す、が、そこをすかさず健の手が伸びる。動きが鈍くなっていたのか、それはすぐに健のこぶしに収まった、だが彼も「いてっ！」すぐに手のひらを開けて振り回した。「くそ！」

怒りが勝ったのか、彼は反対側の手でまた上昇しようとしたそいつを思いきり地面に叩き落とした。今度はまともに当たったらしく、銀色の粒はよろめきながら斜めの軌跡を描き、ついに砂の上に落ちた。ぼす、とかわいい音がしたが、炎も煙も砂ぼこりすら上がらなかった。

振り返ると、荒い息で健の肩は上下している。だが、目は狂気に満ちた喜びでぎらついていた。

「やったぞ……やっとうるせえのが取れた」

もはや銀色の粒はぴくりとも動かなかった。

「あの」僕はおずおずと口をはさむ。「これ、どうすんの？」

「オマエ、家近いだろ」健はいつもの命令口調に戻っていた。

「ビン取ってこい、フタついてるやつ、そんで水責めにすんだよ、それか火責め」

「でも……ちゃんと調べた方が」

「オレの貴重な夏休みをうばった罰だ、急げ」

「でもなんかの文明なのかも」

「何？ ブンメイ？ だから何だ」詰め寄る健に僕は身を縮める。だが

「あれ？ ケンじゃん」公園の向こうからのんきな声が届いた。

健の連れが四人ほど、自転車にまたがったまま、こちらを見ている。

「夏休み中全然連絡取れなかったさあ、どおしたんだよ」

「あれ、ナカノくんもごいっしょでしたかあ？」

「めずらしいな、なんかあったの」

おおナンダヨおまえらか、健は言いながら靴の内側でぎっ、と先ほど落とした粒に砂を覆いかぶせた、そして僕に視線だけよこして「このことはナイショだからな」唇をロクに動かさずにそう告げると、急に

「今からどこ行くんだよ」

大声で彼らの方へ駆けて行ってしまった。

ゲーセン行くんだけど、来る？ いいけどカンジ後ろに乗せろよ。金は？ ねえよ、貸して。一連のかしましい会話が遠ざかっていくと、後に残されたのは僕と、白い小さな砂山、

そして、やっと思い出したように湧き出した蝉の合唱くらいだった。

翌日の登校時。教室に入る直前、廊下で同じクラスの男子ふたりとすれ違った。

ひとりが「ゆんゆんゆん」と歌うように言ってももうひとりがふん、と鼻で笑った嫌な笑い方だった。振り返ってみると、もうひとりがこちらを見て「ゆんゆんゆ〜ん」と言い、今度はふたりで笑いながら去って行った。

席につくと、隣の愛ちゃんが怖い目で僕を見て、すぐに手元に目を落とした。おはよう、と声を掛けると、それには答えず、「タカシくん、ヤバくない？」と自分の夏休み宿題ノートに向かって小さな声で言った。

「なにが？」きょとんとしている僕に、愛ちゃんは周りの目を気にしながらもようやくこう教えてくれた。

「きのう、公園でケンくんが通りかかった時、ひとりで暴れてたんだって？」

「え？」僕はランドセルからノートを出す手を止めた。「暴れて？」

「で、ケンくんが聞いたら、耳元で UFO がゆんゆんゆんゆんってうるさくておかしくなりそうだって泣き出して、ケンくんが追い払ってくれた？ つうか、追い払うマネをしてくれて、それで UFO なくなった、って大喜びしてたって」

「そんな話……」

呆然と、立ち上がる。周りの連中が僕を見て、くすくす笑ったり顔をしかめたり……校内に入ってから何となく人の目が気にはなっていたが、まさかそんなうわさが立っていたとは。

「あっ、」急に愛ちゃんが声を張る。「ケンくんおはよう」

「おお、愛ちゃんおはよ」真夏の太陽並みに輝いた笑顔で、健が愛の脇を通る。まだ口が半分開いていた僕をみて「おや、もうだいじょうぶ？ 中野クン」おおらかにそう笑ってみせた。

悔しいが、こんな時に何も言い返せない。僕は「あ、」と声に出しかけたが、愛ちゃんのことばの方が早かった。

「ケンくん、昨日はわざわざありがとね、マスコット届けてくれて」

「ああ〜」健は今度は澄まして鼻をこすっている。

「ゲーセンでさあ、めっちゃ取れてさ……アレ好きって前に言ってたっけ、な、とか」

おーいケン、他からの呼び声に健はそのまま歩み去った。

「ちょっとさ……」愛ちゃんの声がまたオクターブ下がる。まだ僕を見ようとしない。

「いくらでも UFO 信じるのはいいけど、さすがに良識持った方がいいよ」

あれから気づいたら二十年の月日が流れていた。

そして気づいたら、小学校の同級会、しかも二次会の席に座っていた。

「それにしても中野、すげーよな」

長いテーブル席、隣の木村が、ビール瓶を持ち上げて僕のグラスにまた注いだ。

「今度、上高地にまた新しくラボ建てたんだろ？」

「ああ、あそこもそこそこ環境良いしね」

「ラボってそんなに要るのか？」

「まあ、それぞれやってることが少しずつ違うから」

「特許も取ったんでしょ？」

「運が良かっただけだよ」

「そんで五つも特許取れるの？　すごいなあ」

「何の研究だっけ？」向かいの女子がそう尋ねたが、いやゴメン何度説明聞いてもよく分かんないハハハ、とのけぞって笑う。弾みでグラスが傾いてジンソーダがこぼれる。

「ミツコ飲みすぎ！」隣でかいがいしくおしぼりを使ってテーブルを拭いているのも、クラスメイトのひとりだ。多分ヤツは、ゆんゆんゆん、と冷やかしたどちらか一方だったはずだが、残念、名前を覚えていない。

一次会の会場を出る時、どうする二次会？　と誰かが聞いて、みな一斉に僕の方を見た。

冷やかしてではない。なんと言っても僕はこの中で一番の著名人だったから。

「行こうかな」僕が言うと、かなりの人数がぞろぞろとついて来た。

ちょっぴり、小学校時代の健のことを思い出していた。彼が何か言えば、皆こうやってついて来たんだよな、と。

少しばかり物思いにふけていた時、

——そう言えば聞いた？　柴田が見つかったんだって。

その声に、はっ、と我に返った。一瞬静まったところに、えええ？　とどよめきが広がる。

当時同じクラスにならなかった奴等でも、柴田健は有名だった。そして、高二の冬に突然、行方不明になったということでも。

「俺も聞いたよ」奥の方に座っていた訳知り顔の眼鏡が、何度もうなずいている。彼も誰だか分からない。

「アリゾナの砂漠に、東洋人の男性が全裸で彷徨っていた、ってやつだろ？　保護されてからすったもんだでDNA検査までしてやっと本人確認できた、って」

「先月だっけ？　ABCニュースで見たよ」

「まだ帰国できてないの？」

「いや……親御さんは現地行ったらしいけどね、記憶喪失でことばも満足に話せないらしいし」

「中野くん、知ってた？」急にこちらに振られて、うん？　顔を上げて目を丸くしてみせる。

「いや初耳」知らないわけがない。

健と公園で別れた後、拾い上げたUFOをたんねんに「調べ」て、コミュニケーションをとれるようになるまで何年もかかったのだから。そして、全ての元凶であるヤツに一矢報いるために、それから何年も費やしたのだから。

妻にはUFOが何かと助けてくれたこと、研究の支援をしてくれていることを正直に話し

ている、しかし……中学時代まで妻の彼氏だった健のことについては、一切話していない。

そっと、少し離れた席に座る妻に目をやった健の名が出たことで、動揺しているかもしれない、そんな僕の心配は杞憂だったようだ。彼女は隣の女子と話に夢中だった。

「愛」声をかけると、ちらっとこちらに視線をくれて、彼女は相変わらずのふんわりした笑顔でこちらにグラスを持ち上げてみせた。僕もグラスを上げる。

「ゆーんゆん」

「ゆーんゆん」

なにこのおふたりさん、おじさん照れちゃうよ～、誰かが野次った。名前はええと、コイツも覚えていない。

(了)